

保育理論が具体的保育実践の場から遊離する時、それは空虚な論理的形式化におちいるごとく、逆にまた具体的実践がその理論的根柢を見失う時、悪しき技術主義に流れるのではないかと思ひます。

といつて両者を安易に結びつけることも危険性があると考へられます。教育哲学を専攻し、あまりにも一般化・論理化に重点を置いてきた私は、生きた教育的事実に直面して、一瞬とまどいを感じたのは当然でした。日々の具体的保育実践の底に、抽象化されるにしても、それを支える本質的基盤を見いだすことこそ、保育学の主要な課題であると思へるようになったのは、現場教師との共同研究であつたと思ひます。

なによりも子どもたちひとりひとりの姿をみつめ、その豊かな成長を期待する素ぼくな願ひを私たち研究者は忘れてはならないと思ひます。このような観点か

らまず私たちは、子どもたちの姿―遊びの観察からはじめました。しかしこの課題は、むしろ実証的研究にうとい私に、一層大きな障害を与えました。それは研

倉橋賞を受賞して

児 雄 三 頭 西

究方法はもちろんですが、なによりも子どもたちの理解でした。

幼児の全体的把握の願ひが、とかく分析的抽象化をさまたげる危険性を与えま

した。この障害に直面して、私たちを勇気づけてくれたのは、倉橋賞の受賞でした。この意味でこの賞は、むしろ暗中模索の研究努力に与えられたのではないかと思ひます。

この遊びの研究を通して強く感じましたことは、まず幼児教育の具体的目標の自覚化であると思ひます。別言すれば、「どのような人間に育てたいのか」という問題であります。

子どもたちは可塑性をもつといわれますが、それだけ保育者のあり方が子どもたちに強く影響してくるのではないかと思ひます。

第二に共同研究の組織化であります。安易な問題解決をさけるために、専攻分野の異なった研究者の参加が不可欠ではないかと思ひます。以上受賞にあつた、この研究過程において得たものを、反省の意味でしるしてみました。